長忌寸意吉麻呂論(二)

岡田喜久男

一

前稿(『日本文学研究』第二一号)では、長忌寸意吉麻呂の、歌の特徴と伝統との関わりを考えたのであるが、今回は次に挙げる『万葉集』巻十六所載の八首について論じてみたい。

長忌寸意吉麻呂の歌八首

3824 さし鍋に湯沸かせ子ども櫟津の檜橋より来む孤に浴むさむ

右の一首は、伝へて云はく、一時に衆集ひて宴飲しき。時に夜漏三更にて、孤の声聞こゆ。ここに衆諸興麻呂を誘ひて曰はく、この饌具、雑器、孤声、河橋の物に関けて、但に歌を作れといへれば、声に応へてこの歌を作りきといふ。

行縢、蔓菁、食薦、屋梁を詠む歌

3825 食薦敷き蔓菁煮持ち来梁に行縢懸けて息むこの公

荷葉を詠む歌

3826 蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあらし

双六の頭を詠む歌

3827 一二の目のみにはあらず五六三四さへありけり双六の采

香、塔、則、屎、鮒、奴を詠む歌

3828 香塗れる塔にな寄りそ川隅の屎鮒喫める痛き女奴

酢、醤、蒜、鯛、水葱を詠む歌

3829 醤酢に蒜搗き合てて鯛願ふわれにな見せそ水葱の羹

玉掃、鎌、天木香、棗を詠む歌

3830 玉掃刈り来鎌麻呂室の樹と棗が本とかき掃かむため

白鷺の木を啄ひて飛ぶを詠む歌

3831 池神の力士舞かも白鷺の桙啄ひ持ちて飛びわたるらむ

以上の八首が、題材、詠歌の場、歌い方において特殊であるとの認識は多くの人の持つ所で、このような歌が、当時の歌世界とどのような関係にあるのかについては、意吉麻呂論の必ず触れる点であるが、それは八首の歌を正しく理解してからの事であろう。この八首について私なりの解釈を述べてみたい。

二

(3824)の歌は、左注に作歌事情が詳しいので、それに従って解釈する

のが通例である。「酒宴の夜、孤の声が聞こえてきたので、人々が意吉麻呂に、饌具（歌中ではさし鍋―柄のついた鍋―）、雑器（イチヒツ―櫃―）、孤声（来む―コム―）、河橋（檜橋）に関係付けて歌を詠めと注文をした。彼は即座に此歌を作った。」と左注は伝えるのである。

これに類する伝承は、巻十六(3837)の左注、(3838)(3839)の左注があり、記紀にも数例あることは前稿で述べたが、意吉麻呂の場合、無関係な四種の品が限定されていること、(3837)の場合は荷葉（はちすば）だけ）、特に意吉麻呂に対して歌の注文が為されていること、(3837)は、右兵衛（姓名未詳）とあって姓名が分らないし、他の場合は不特定多数に詠歌の命が下っている）が注目されねばならない。ただしこの論議は、左注が事実を伝えているとの前提で成り立つのであるが、聊か出来すぎの感があって、疑問が全く無いでもない。第一に、饌具、雑器、孤声、河橋と二字によって品物が列挙されているが、座興での口頭の注文として果して妥当であるかどうか。第二に櫟津の中に「櫃（ひつ）」を隠し、檜橋より来むに、孤の声コンが含まれるなど、後の物名と同じ手法が用いられているが、他の意吉麻呂の歌や、集中の数種詠物歌の技法と違って巧妙すぎるのではないか、などである。最も単純な解答としては、単に孤を懲らす歌であったが、歌の中に櫃や孤声を見出した人が、机上の作として左注を綴ったとする考え方であるが、勿論何の根拠がある分ではない。今はやはり左注の通りの場でこの歌が誕生したと理解すべきであろう。とにかく、意吉麻呂に当意即妙の歌を期待する人達が存在し、それに彼が充分応えたのであった。

(3837)の左注に出る右兵衛は「歌作の芸に多能なり」とあり、「諸人酒酣（たけなは）にして歌舞絡繹する」時に、荷葉（はちすば）に関係付けての歌が所望され、即座に詠んだとされているが、意吉麻呂は遥かに難しい注文に応えているわけで、大いに喝采を博したことであろう。

動物の声を詠み込んだ歌としては、東歌の

3521 烏とふ大軽率（をそ）鳥のまさでにも来まさぬ君を児ろ来とぞ鳴く

に、烏の声（コロク）が詠まれているが、民謡の技巧と言うことが出来よう。意吉麻呂のこの歌について土屋文明『万葉集私注』（以下『私注』と略称。）は

意吉麻呂は巻一以来見えた、集中顕著な作者の一人である。以下の諸作を見ると、すべて本格的の歌ではなく、全く遊戯の為である。此の一首も後文により、宴席で、内容までも注文を受けて作ったものである。歌を作る者としては、此の位のことは手間暇の入らぬことではあったらうが、彼等に正しい文学意識などのなかったことも否めまい。それは時流で致方ないことの如くにも見えるが、一般文化の基盤の弱さも考へられる。或はかうした遊びの歌は、記載されたよりも広く行はれ、本集には、その中でも、形の整ったものだけが、収められて居るのかも知れない。

と酷評するのであるが、宝亀三年（七七二年）藤原浜成が著した日本最古の歌論書『歌経標式』を見ると、歌体論のところで「査体」の一つとして「離会」を挙げ、例歌の

春日山峯漕ぐ舟の棄師寺淡路の島のからすきのへら

を評して「譬へば牛馬犬鼠の類、一処に相会へるが如くにて、雅意あること無し。」と言うが、これは巻十六(3838)(3839)の「無心所著歌」と同工異曲のものである。又同書の「譴警」は「語を隠して情を露すを

言ふなり。式を立つる者の歌に」と浜成自身の歌を

ねずみのいへ　一句　よねつきふるひ　二句　きをきりて　三句　ひきぎりいだす　四句　よつといふかそれ　五句

と書き、その謎を解いて

ねずみのいへは穴の名なり、よねつきふるひは是粉の名なり、きをきりてひきぎりだすは是火の名なり、よつとは四の音なり。即ち是穴粉火四の義なり。故に譴警と曰ふ。かくの如き歌は名づけて甲第と為すなり。」

と、進士の試験の最優者からきて、最上のものを意味する甲第と自歌を自讃している。その自信の程は別にしても、歌の世界の広がりが謎々歌にまで及んでいる事、「語を隠して」という点が、意吉麻呂の歌に連なるように思われるのである。『万葉集』の中にも「粟」と「逢ふ」、「松」と「待つ」の掛け詞の類は多いが、笠女郎が大伴家持に贈った

588 白鳥の飛羽山松の待ちつつそわが恋ひわたるこの月ごろを

などを見ると「白鳥が飛ぶ、飛羽山のとぱ、（その山の）松のように永久にあなたを待つ」と複雑な技巧で、結果的に語を隠しているし、更に深く語を隠し、しかも歌としてもすぐれている例として、十市皇女が薨じた時の高市皇子の挽歌

158 山吹の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく

が、山吹↓黄、山清水↓泉、即ち黄泉を含むとされるのなどは、その最たるものである。

このような歌が「正しい文学意識」の無さから来ると断ずる事は易しいが、当時の、歌の可能性を様々に模索していた人々の事を思うと聊か酷に過ぎるのではなかろうか。

次に、数種の物を一首にまとめる歌、即ち数首詠物歌は意吉麻呂以外にも巻十六に

忌部首詠数種物歌
境部王詠数種物歌 (3832)(3833)
作主未詳歌一首 (3834)
右兵衛作歌 (3837)
高宮王詠数種物歌二首 (3855)(3856)

などがあり、他巻にも

1014 前日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも
（橘文成）

1538 萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花（山上憶良）

などその顕著な例である。今日でも三題噺、五題噺など、寄席の大喜利でよく行われるが、意吉麻呂の時代においては、歌の新しい作り方として盛んに行われたようで、王や憶良の作があることから、知的所産の歌として賞されたのであろう。それを遊戯的とか、宴席の座興として余技の歌作とするのは誤りで、或る種の感動を以って受入れられたと考えるべきである。

(3825)の歌も、行縢（毛皮で作り、腰から足の前面をおおうもの）、蔓菁、食薦（食事の時の敷物）、屋梁と言う無関係な四品を一つの場面に入れて歌ったもので、契沖『万葉集代匠記』（以下『代匠記』と略称）

旅より来著て行縢をぬぎて、梁に懸て息む此公に進むべければ、食薦を敷、羮には蔓菁を煮て早く飯持て来よと奴婢を急がす意なり。

から始まって、武田祐吉『万葉集全註釈』（以下『全註釈』と略称）

建築の見分などに来た人をもてなす意味に詠まれている。

など、歌がどのような場を想定して詠んだかの意見の分れる歌であるが、同じ『全註釈』は行縢が梁に懸けられている理由として、

この梁は、まだ家屋に使用していない材木で、地上に置いてある。それに行縢を敷いて席としたのである。

と説明している。合理的な解釈で、普通の家では梁に行縢を懸けることは、他に偶意でもなければ考えられない。

ところで従来あまり言及されていないのであるが、この命令された人―勿論女性であろう―の事について考えてみたい。古代でも、神事や宮廷以外では料理は専ら女性の仕事であったろうが、その内容を歌ったものはあまり集中に見当らない。僅かに、巻十六の能登国歌

3880 かしまねの　机の島の　小螺を　い拾ひ持ち来て　石もち　突き破り　早川に　洗ひ濯ぎ　辛塩に　こごと揉み　高坏に　こごと盛り　机に立てて　母に奉りつや　愛づ児の刀自　父に献りつや　みめ児の刀自

に小螺（コシタカガンガラ）を調理して、愛づ児の刀自（かわいいおかみさん）が両親に奉仕する姿が歌われている。次にアヲナであるが、有名な『古事記』仁徳天皇の、石之日売嫉妬物語中の歌謡及び前文に

爾に黒日売、其の国の山方の地に大坐さしめて、大御飯を献りき。是に大御羮を煮むと為て、其地の菘菜を採む時に、天皇其の嬢子の菘を採める処に到り坐して歌曰ひたまひしく

山県に蒔ける阿袁那も吉備人と共にし採めば楽しくもあるか

と歌われている。野に菜の羮を煮る歌としては、竹取翁の歌(3791)の前文や、

1879 春日野に　煙立つ見ゆ　少女らし　春野のうはぎ　採みて煮らしも

があって、後者は嫁菜を煮て春の野で遊ぶ少女達が明るく歌われている。菜の羮は若い女性と結びついて考えられていたし、意吉麻呂のこの歌は、貴人に奉仕する少女を詠んだものであったろう。食薦の上に菜の羮を置いて食する公と、それに奉仕する少女を歌のテーマにしたことがこの歌の手柄だったのである。

(3826)の「荷葉」は、蓮の葉のことで、(3837)の左注に「饌食盛之皆用二荷葉一」とあるように、宴席で料理を盛るのに用いた。当然意吉麻呂の参加した宴席にも皿として荷葉が用いられていた可能性が高い。そこでそれを見た意吉麻呂がこの歌を詠んだ、とする説が有力である。『全註釈』は「この歌も宴会の席上の作で、食物を盛った荷葉を詠んだのだろう」とし、澤瀉久孝『万葉集注釈』（以下『注釈』と略称）も「蓮葉はかくこそあるもの…『かくこそ』とは宴席の食物を盛った見事な葉をさした。」とするが、『私注』は、

人の家に愛玩されて居る蓮を見せられ、一首作れと言はれた作ででもあらうか。その茂つて大なるを讃歎のつもりであらうが、自家のものを芋の葉と貶しめるのは、阿ねるに似て卑しい。蓮と

芋の区別を知らなかつたわけではあるまい。尤も此の程度の阿諛は、後世、現代の吾吾歌よみに比べれば、まだまだ上品とすべきかも知れない。

と、文明一流の厳しく皮肉な言い方であるが、「その茂って大なる」とあるところからして、料理を盛る蓮ではなく、庭の蓮を言っているようである。「荷葉を詠む歌」と題詞にあり、「意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあらし」の歌詞からして、素直に考えれば、『私注』の説が正しいように思われる。『和名抄』にも「四声字苑云、芋(干遇反以倍乃伊毛)葉似レ荷其根可レ食レ之」とあるように、葉の様子が似ている芋と対比して詠んでいるのであるが、芋と蓮との区別を初めて知ったとす点が聊か無理で、そこに裏の意を見るのが伊藤博氏の説である。

まず(A)(3826)を指している―筆者注)であるが、これが宴席のものであることは、「意吉麻呂が家なるものは」の表現であきらかであろう。それにしても、「私は今まで芋と蓮をまちがえていました。お宅の蓮はまことに見事」といって、蓮をほめただけの歌であるなら、物名歌としての興味はたしかにない。……今は結論だけを述べると、この歌の蓮葉の背後には、美人が連想されていたと考えられる。宴飲の座に、蓮は事実生いしげっていたであろう。一つこの蓮葉(美人)というものはこういうものなんですな。今ぞ知りました。してみると私の家のもの(妻)なんかは、それに似て非の芋のはっぱであるようです」とうたったのが、今の歌であるまいか。……美しく生いしげる宴席には、主人公にかかわる美人が、事実いたのかもしれない。蓮を前に、蓮を美人にたとえた古い詩歌や話が語られたのかもしれない。…こう見てくると、ウモ(芋)にはイモ(妹)がかけられていると考えてもあながち妄想ではあるまい。(「長意吉麻呂の物名歌」『万葉集の歌人と作品上』)

説得力のある説である。万葉の中では、巻十一の

2626 古衣打棄つる人は秋風の立ちくる時に物思ふものぞ

の「古衣」が古女房を喩え

2651 難波人葦火焚く屋の煤してあれどおのが妻こそ常めづらしき

の歌は古女房を讃え、巻十二の

3009 橡の衣解き洗ひ真土山本つ人にはなほしかずけり

巻十六の

3808 住吉の小集楽に出でてうつつにもおの妻すらを鏡と見つも

右は、伝へて云はく、「むかし、鄙人あり。姓名はいまだ詳らかにあらず。時に郷里の男女、もろもろ集ひて野遊す。この会集の中に鄙人の夫婦あり。その婦、容姿の端正しきこと、衆諸に秀れたり。すなはち、その鄙人の意に、いよいよ妻を愛しぶる情を増す。すなはち、この歌を作りて、美しき貌を賛嘆す」といふ。

など、いずれも古女房を讃えた歌であるが、これ等の歌が詠まれたのは人々の心の中で逆の思いが普通に起り得たことを意味するもので、意吉麻呂の歌がまさしくそれであったと考えるのである。記紀の嫉妬物語などを見ると、「賢し女」や「麗し女」を求めて妻問ふ男性と、「…汝こそは男に坐せば打ち廻る島の埼埼かき廻み磯の埼落ちず若草の妻持たせらめ吾はもよ女にしあれ

ば　汝を除て　男は無し　汝を除て　夫は無し…」と一人の男性を待つ女性の姿が歌われている。万葉の時代も同様の事が普通に起り、意吉麻呂のかなり率直な物言いに、衆人どっと湧いたのであろう。

(3827)は双六の采を、その一から六の目だけで詠んだ極めて特異なものである。双六は中国から渡来したもので、二個の采を竹筒から振り出し、黒白十二ずつの馬（石）を互に局（盤）上で進め合う遊びで、賭博とするようになり、持統紀三年十二月八日の「双六を禁め断む」とあるのが初出で、その後も禁止令が出されている。持統朝に禁止令が出た事から、万葉時代には激しく流行していたようで、巻十六には舎人親王が侍座の者に懸賞募集した時の歌「心の著く所無き歌」の中にも

3838 吾妹子が額に生ふる双六の特負の牛の鞍の上の瘡

と双六が詠まれている。意吉麻呂の歌は采の目だけを詠んでいて、歌になりにくい点で注目されるが、この歌にもそれ以上の意味が隠されていると思われる。伊藤博氏は前掲の「長意吉麻呂の物名歌」の中で、

人間の目は一一だけだが、双六は、一一、一二だけにとどまらぬ（原文「のみ」の辞大切）五六、三四というように、めまぐるしく変ずる目があるというので、その多彩で奇妙な目を、人間の目に対比したところにこの歌のおもしろさがあるのであろう。双六に遊びつかれたのちの宴席の作でもあろうか。

と考えているが、一案として、前歌に倣って「すぐろく」の語が隠されているとみる説を提出してみたい。即ち「一二の目のみにあらず。ゴロクサム」がその部分で、「ズ」と「ス」「ゴ」と「グ」の相違があって無理のようであるが、「すぐろく」は後に「すごろく」となるように、歌い方によっては以外と近いのではなかろうか。

『代匠記』は、この歌を山上憶良の「秋野の花を詠む歌」の二首目、前掲の(1533)「萩の花尾花葛花…」の類であるとするが、諸注よく引くように、催馬楽の「大芹」の冒頭

大芹は　国の禁物　小芹こそ　ゆでても旨し、

は、表面では植物の大芹と小芹の比較であるが、国禁の賭博である樗蒲や双六を歌ったものであることはその後半に

犀角の賽　平賽　頭賽　両面　かすめ浮けたる　切りとほし
金はめ盤木　五六がへし　一六の賽や　四三賽や

と道具や賽の目が歌われていることからも明かである。いつの世にも博打の魔力に取り憑かれた人は、自分に運が来る事を祈るのであるが、賽の目と同じように決して一定しないのが常である。その嘆きを自嘲的に歌っているのがこの意吉麻呂の歌である。なお川上富吉氏は「物名の歌―『歌作の芸』をめぐって―」（『万葉歌人の研究』所収）の中で

一（ひと＝人）には、二つの眼だけであるが、それだけではなく、五六（＝御禄）三（＝讃・惨）四（＝死）まであることだ。双六の眼には。罪なことだなあ

と試訳されている。語彙的裏付けが難しいように思われるが、さもありなむと思われる意吉麻呂の歌であることもまた確かである。

(3828)は(3825)と同様、互に無関係、もしくは対極的な物数種を詠んだ歌で、いかなる場合に詠まれたのかは明かでない。香と塔は尊貴・清浄なもの、厠と屎は不浄の物、それに鮒と奴という歌に不向な物六種を一首にまとめたもので、歌の内容は(3825)より分りやすい。『代匠記』が

香塗れる塔は清浄にて敬まひ尊とぶべき事の限なるに、川隅の屎鮒はみて其身賤しき限なる女奴は、依てなけがしそとよめるなり

と解して以来、今もあまり解釈の動かない歌であるし、『私注』が

此も与へられた数種のものを、継ぎ合せ、何とか意味のあるやうに工夫したにすぎない。

と評したように、あまり高く評価されていない。しかし、先に挙げた『歌経標式』の謎歌が甲第と言うのであれば、この(3828)も人々に拍手喝采を博したことは確かであろう。ただ、この歌に他意がないかと探ると、次のような歌と或いは関係あるのではないかと思えるのである。

2574 面忘れだにも得為やと手握りて打てども懲りず恋といふ奴

この歌の「恋といふ奴」は他に

2907 大夫のさとき心もいまは無し恋の奴に我は死ぬべし

3816 家にありし櫃にかぎさし蔵めてし恋の奴がつかみかかりて

などに詠まれている。特に(3816)は左注に

右の歌一首は、穂積親王、宴飲の日に、酒酣にある時に、好みてこの歌を誦み、もちて恒の賞と為す。

とあるように、当時の狭い社交界から考えて、意吉麻呂も常々よく知っていたと思われる歌である。これ等の例歌からみても、そのどうしようもない恋心を奴と称するのは広く行われていたもののようである。又(2574)の「懲りず」であるが、上二段活用の動詞「懲る」は集中「懲りず」(384)(2574)「懲りにけむ」(519)のように全てコリの形でしか見出せないので、或いは意吉麻呂の歌の「香塗れる」と「痛き女奴」は人々が懲りずにする「恋」を裏に隠しているのではないかと考えるのである。香を「コリ」と訓むことは、皇極紀元年七月二十七日の条

干時、蘇我大臣、手執二香鑪一、焼レ香発レ願。

の古訓や、時代は下るが『沙石集』の

僧をば髪長、堂をこりたきなんどといひて

などを見ても動かないと思う。更に、「香塗れる塔」自体、高貴な男性を喩えていると考えることが出来るのではないか。荷葉に美女を喩え、数首前の(3821)では、姓の低い嫗士と関係をもった児部女王を嗤い

3821 うましもいづくか飽かじ尺度らし角のふくれにしぐひ合ひにけむ

と歌ったのを考えると、表面は、浄、不浄を、裏で貴顕の男と身分の低い女とを隠しているとするのは、むしろ自然な解釈ではないかと思われるのである。

(3829)は、酢・醤・蒜・鯛・水葱を詠んだもので、他の数種詠物歌と違って、調味料、魚、野菜と食物関係で統一されている。調味料として最も一般的なものは塩で、「辛き恋」の序としてよく登場するが、

調味料としての酢、醤は集中こと以外に例がない。（ただし酢は「ス」の訓仮名として用いられている。）酢は今日のものと大差ないと思われるし、醤は『延喜式』の「大膳下」の造雑物法の中に、材料とその割合が示されている。それによると、大豆、米、糯米、小麦、酒、塩などから作るもろみのようなものであった。蒜はのびるで、応神記の歌謡にも「いざ子ども、野蒜流摘みに　比流摘みに…」とあり、『和名抄』では和え物としての食べ方まで書いてあるように、人々によく食べられた。鯛は(1740)で「鰹釣り鯛釣り矜り…」と歌われ、『古事記』の「海幸彦と山幸彦」の神話にも喉に鉤を刺した魚として登場するように、魚の中では美味なものとされていたようである。この歌のように、醤と酢の合せたものに、蒜を搗き加えたものを鯛にかけて食べるのは、いかにもおいしそうであるが（今のたたきに似ている）意吉麻呂も美味なものの典型として歌っていると考えるのが妥当であろう。葱は、天智紀の歌謡に、

　み吉野の　吉野の鮎　鮎こそは　島辺も良き　え苦しゑ　水葱の本　芹の木　吾は苦しゑ

と歌われ、『延喜式』の左右京職に

　凡京中不レ聽営二水田一。但大小路辺及卑湿之地。聽レ殖二水葱芹之類一。不レ得二因レ此広レ溝迫レ路

とあるように、京中の路辺や卑湿の地に殖えられた事が分る。これを羹として食べるのは普通の事であったが、上述の鯛料理と比べると、そこに何等かの意味が生まれてくるのである。鹿持雅澄『万葉集古義』は

　醤と酢とに、蒜を搗きまじへて鯛もがな、これをかけてくらはむものをと、濃厚なる物をねがふ吾なれば、淡薄なる水葱の羹などは、見することなかれとなり。

と、濃厚、淡薄の二品として考えているし、『注釈』も水葱の羹を「味の淡白な」ものと考えている。『全註釈』は

　宴会の席上での即吟であろう。おりしも盛夏で、さっぱりした食物を欲しているので、持ち出されたナギの煮物を欲しない意味に歌ったものだろうと思われる。

と解説している。諸注釈を見るに、水葱の羹を、文字通り、熱い汁物として、すずしげな鯛料理と対比したとみるか、淡白な吸物と解して、濃厚な料理と対比させるかの二通りの考えが行われている。歌を夏の作として前者に解するのは、酒宴での酔いのまわった状態を考えると果して如何なものであろうか。古代の料理については、近年研究や復元（？）が盛んであるが、料理に涼しさや、さっぱりした趣を求めたかどうかは明かでない。むしろ、味のよしあし、或いは求めにくい材料を使ったかどうか、謂わゆる御馳走であるか否かが、当時問題にされたのではなかろうか。その事から言えば、水葱は、この歌の他に、植子水葱(407)(3415)、子水葱が花(3576)と身近に植えた水葱があり、甲府盆地とその周辺では、炭化したコナギの種実が出土するという事である。（「コナギと古代遺跡」『万葉集の考古学』森浩一編）、極めて一般的に人々が口にした菜だったのである。それに比べると、鯛は、古典文学大系本『古事記』の上巻「赤海鯽魚」の頭注

　鯛である。鯽はフナ、その上に海の字を冠すると、海のフナ、即ちチヌ（黒鯛）となり、更にその上に赤の字を冠すると、黒鯛

の形で色の赤いもの、即ち鯛の意となる。下の魚の字はそえ字。

赤海鯽魚は万葉の戯書の先駆とも見られるものである。書紀には「赤女」「赤鯛」「口女」「鯛女」などと伝え、「赤女、鯛魚名也。」と注している。

を見ると、真鯛が主かと思われ、万葉では先に挙げた(1740)に鰹と並んで歌われている。神楽歌の小前張(ことさいばり)「磯良崎(いそらがさき)」に

本　磯良が崎に　鯛釣る海人(あま)の

末　我妹子がためと　鯛釣る海人の　鯛釣る海人の

とあって、恋人のために苦労して釣る様子が窺える。以上から見て、食用とする魚のうちでも美味なるものと考えられていたし、人々は苦労して鯛を釣っていたと、と考えてよいであろう。平安朝の例ではあるが、『土佐日記』承平五年(935年)正月十四日の条に、船君(貫之)が精進落ちの料理のために、鯛を船頭から買うのであるが、

船君、節忌す。精進物なければ、午刻(むまとき)より後に、楫(かぢ)取のきのふ釣りたりし鯛に、銭なければ、米を取りかけて、落ちられぬ。かかることなほありぬ。楫取、また鯛持て来たり。米、酒、しばしば呉る。楫取、気色悪しからず。

とある。「ぜになければ」については、萩谷朴『土佐日記全注釈』の説のように他意のあるものと思うが、大切な米や酒を与える位に得難いものであった鯛の高価さは知る事が出来る。まして奈良朝の大和の人々にとっては更に得難い魚であった。

以上をまとめると、醬酢に蒜を搗き合えて鯛にかけて食べるような御馳走を望んでいる私に、いつでも食べているような水葱の吸い物なんか出さないで下さいよ、という訳が生れてくるのであるが、いかがであろうか。

(3830)は、鎌と三種の植物（玉掃は、『代匠記』に「今の題並に歌に依に、玉掃は草の名と見えたり。されど如何なる草と云事を知らず。」とあったが、『全註釈』他で説くように今の高野ぼうきと思われる。）を詠んだものであるが、『全註釈』で、

いずれも庭園関係の品なので、無理がすくない。

と言い、『私注』が

これは与へられたものが、関係つけ易いので、いくらか意味の立てられるところまでになって居る。

と評するのはいかがであろうか。たしかに、意吉麻呂の巧みな詠み方によって、四種の物が不自然ではなく結び付けられているが、元々この四種の関係が深いとはとても考えられない。鎌を鎌麻呂と擬人化したのは極めて珍らしいもので、催馬楽の「鶏は鳴きぬ」に「桜麻呂」（人を意味す）、体源鈔所収の風俗歌「うばらとぎ」に「稲子丸(いなこまろ)」があるが、道具である鎌を擬人化し、それに命令するというのは特異な表現であった。天木香(むろ)は今の杜松（ねず）とされるが、集中に礒や浦にある木として歌われている。意吉麻呂の歌以外は「妹を思う情」で一致しているので、用字の「室木」「室乃樹」から考えても、「室」を連想する木であったかと思われるが確証は無い。

蓑が詠まれたのは、この意吉麻呂の歌を除くと同じ巻十六の、作

者不詳の数種詠物歌

3834 梨棗黍に粟つぎ延ふ葛の後も逢はむと葵花咲く

だけで、恐らく中国から入って来た果樹・棗が寡席の話題になり、実は生か、干して食されたのであろう。この歌については小島憲之氏に、

棗（上の遊仙窟の「早」）と「帚」（sao）の同音をつらね、「棗」（サウ）をかき「掃ふ」（サウ）ために「早」く（サウ）玉帚（サウ）を苅っておいで、の意を暗に示してゐるのではなからうか。（『上代日本文学と中国文学』中）

と漢字の音を技巧とする説がある。(3791)の中に中国の孝子伝原穀説話が歌われ、更に小島氏は「巻十六の詞書（左注）をみると遊仙窟語が多い」（前掲同書）と例を挙げて指摘される。律令国家を支える貴族や官僚達が、漢籍や中国語の習得に多大の努力をしていたのは事実であるし、その一員たる意吉麻呂が彼らの期待に応えて、漢字音を中心に据えて歌を詠んだとしたら、必ず人々の歓迎するところとなったと思われる。

(3831)は白鷺が木を啄えて飛ぶのを詠むという、珍らしく動く物を詠んだものである。鴻巣盛広『万葉集全釈』に「こんな絵でもあったのであらう」とあり、これを支持して『私注』に

恐らくは実際の白鷺を目撃しての作ではあるまい。全釈に畫賛だらうとあるのも肯へる見方である。

などあるように、絵を見ての作であろうとする説が有力である。然し、その根拠については、古典文学大系本『万葉集』のこの歌の補注が、

この第八首に限り、課題は物ではなく、白鷺が木を啄い飛ぶという姿態である。そこにそのような絵画を見せられて詠じたもの

と想像する伊藤博氏説が支持される根拠がある。

と言うように確たるものではない。私は素直に、白鷺が枝をくわえて飛ぶのを見慣れていた当時の人が、意吉麻呂に「枝をくわえた鳥の、飛ぶところ」を歌えと注文したと考えている。人々は意吉麻呂が、どんな形で注文に応えるかと期待していると、単純に、巣作りに枝をくわえて白鷺が飛んでいる、と詠まず、枝を枠に見立てて、枠を持つ力士儛と結びつけて歌ったのである。又もや、ヤンヤの喝采を受けた事であろう。

この力士儛については、山田孝雄の「力士儛」（『万葉集考叢』所収「万葉集訓義考」）によって、外来の伎楽の一つで、面を付け、枠を持った力士が、崑崙や五人の女性と舞うものであることが明かにされた。更に今日では、その舞が、何か性的な滑稽味を帯びたものであったとされる、（古典文学大系本『万葉集』四のこの歌の補注）そうであると、一層意吉麻呂の歌は意表をついたものとなるわけで、

(1821)春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちてうぐひすの鳴く

などのように、愛らしい小鳥、枝を運ぶ白鷺の姿が、一瞬に金剛力士の滑稽な舞へと転換する手法は見事である。鳥の動作についての観察は、古代人が最も得意としたところで、『古事記』上巻の八千矛の神の歌などは圧巻である。枝を運ぶ鳥が注目されているのは歌の題材としては珍らしいものであるが、古代の人々の鳥を見る目の

こまかさから考えて当然のものであった。

三

巻十六所載の長忌寸意吉麻呂の歌八首を、私なりに解釈してみたのであるが、一首として単純な歌はなかった。このことは、意吉麻呂の活躍した時代、即ち柿本人麻呂、高市黒人をはじめ、天武・持統に連なる皇室歌人群が優秀な作品を生み出した万葉第二期において、すでに歌の知的趣向が発達し、かつ享受されていた事を改めて確認することになったわけである。

それは、小島憲之氏が大著『上代日本文学と中国文学』上・中・下の中で繰り返し説かれるように、中国文学の大いなる影響がある事を第一の理由とし、第二に文字化による歌の変化、第三に、宴席などの歌の場の拡大、第四に以上を全て含めて理知的存在としての歌へ興味が増したことなどが背後の要因としてあり、第二期の万葉歌の一面を形成したのであった。

最初に、意吉麻呂論の常として、彼の歌と当時の歌世界との関係が重大な問題として存在すると指摘しておいたのであるが、歌一首一首を丁寧に見てみると、当時の貴族や官僚が形成する、歌の世界の最先端にあるという事実が確認されると同時に、意吉麻呂が独自の才能によって、その流れに流されず、個性的な歌群を生したことが明かになったと思う。それこそまさしく、「歌作の芸」と呼ぶもので、後に大伴家持が「遊芸の庭」（3969の前文）と呼んだものに通じる歌の新しい分野であった。